

大学正課体育の授業に関する研究 (その1)

—体育の各目標に対する学生の意識の現状—

松下 雅雄, 小原 晃, 木原 資裕, 外川 重信

Study on Teaching of University Regular

Physical Education Class (I)

— with reference to the present status of the consciousness
toward the objects of physical education in the students —

Masao Matsushita, Akira Obara,

Motohiro Kihara and Shigenobu Sotokawa

Abstract

The purpose of this study was to ascertain the present status of the consciousness toward the objects of physical education in two group students. In the one group, the students were usually taking exercise in a sport club (A group) and in the other group, the students were hardly taking exercise except physical education class (B group).

The questionnaire was distributed in Jan. to Feb. 1984. It contained the following questions; 1) preservation and improvement of health, 2) preservation and improvement of physical fitness, 3) acquisition of motor skills, 4) development of social attitude, and 5) development of foundation for life sport activity. Responses were obtained using 5-point-scale-type selection (5-agree very well, 4-agree, 3-neither, 2-disagree, 1-totally disagree).

The subjects were 1563 students taking regular physical education class at University of Tsukuba. Effective number of samples was 1080 (recovery rate 69.1%). In them, the number of A group was 374, and the number of B-group was 409.

The results were summerized as follows :

- 1) A group showed significantly larger positive response than B group in all items.
- 2) However, A group showed the poorly positive response in the following items; ① levels of physical fitness, ② understanding of practice and coaching methods for

improvement of skills, ③ leadership in sport activity, ④ promotion of sport activity and the leadership, ⑤ participation of sport events and ⑥ intention to participate of sport events in the future.

- 3) B group showed the positive response in the following items; ① understanding of importance of health and physical fitness, ② understanding of manner in sport activity and ③ interest in sport and its practice.
- 4) B group naturally showed highly negative response in the following items; ① practice of sport for preservation or improvement of health, physical fitness and motor skills, ② practice of sports for wealthy life, ③ participation in sport events and sport activity. And, the group also showed negative response in the following items; ① levels of physical fitness, ② improvement of motor skills after the start of university life, ③ understanding of practice and coaching methods for improvement of the skills, ④ leadership in sport activity and it in the future, ⑤ intention to practice sports for preservation or improvement of health, physical fitness and motor skills and ⑥ intention to participate in sport events and sport activity group.

From above results, there are significantly differences between the group usually taking exercise in a sport club and the group hardly taking exercise except physical education class on the present status of the consciousness toward the objects of physical education. So, it is suggested that the contents of learning and the emphasized points of teaching could be necessary to be distinguished according to the present status of the consciousness toward the objects.

I 緒言

本研究は、昭和58年度に行われた筑波大学体育センター・プロジェクト研究「大学正課体育における授業効果に関する調査研究」³⁾の一部、「体育目標に対する意識の現状」について研究をすすめたものである。

58年度の研究では、体育授業の目標に対する意識の現状については、全学年および1年生と4年生の比較の観点から検討がすすめられた。その結果、全学年においては、「大学入学後の体力の向上」、「将来におけるスポーツ活動の推進と指導」、「スポーツ行事への参加」以外はほぼ良好な状態であること、1年生と4年生の比較では、「大学入学後の体力・技能の向上」、「楽しめる程度の技能水準のスポーツの保有」、「運動実践やその意図」、「ス

ポーツ活動での指導・推進」、「技能向上のための練習・指導法の理解」などの多くの項目で4年生の方が良好であること、などが明らかにされた。

一方、昭和56年度から着手された「運動生活に関する調査」^{5), 11), 12)}では、昭和56, 58年度に調査が実施され、学習者である学生の日常での運動行動、正課体育への対応およびそれらの関係について検討されてきた。この一連の研究では、特に正課体育の授業以外に何ら意図的運動を行わない Stay 階層の指導のあり方等が論じられてきた。その論点は、自己の体力や健康の評価以外は、運動への参加動機や阻害要因、履修希望科目やその理由、授業での期待内容などが主なものであった。

しかし、Stay 階層に対して、目標達成へ

のより効果的な授業を進めるには、Stay 階層者の目標に対する意識の現状を把握しておくことが必要と考えられる。

そこで、本研究では、学習者である学生を、日常生活で積極的に運動をしている群と授業以外にはほとんど運動を行わない消極的な群に分け、これら2つの群が、体育の目標に照した現状においては、どのような点が充分であり、またどの点が不足していると意識しているかを把握し、今後の正課体育授業での効果的な指導のあり方を明らかにするための基礎的資料をえることを目的とした。

II 研究方法

1. 調査項目

調査項目は、体育授業の目標に関する1.健康の保持・増進(5項目)、2.体力の維持・向上(9項目)、3.運動技能の習得(8項目)、4.社会的態度や能力の育成(5項目)、5.生涯体育への基礎づくり(5項目)であった(161ページの調査用紙参照)。

質問に対する回答は、5.非常によく当てはまる、4.当てはまる、3.どちらとも言えない、2.あまり当てはまらない、1.まったく当てはまらない、の5段階法によって回答させた。

現在における日常での運動生活をみるために、1.体育系の課外活動団体に所属し運動している、2.自由時間に、自由なやり方で運動を楽しんでいる、3.スポーツ・デーやスポーツ教室などの体育的プログラムに参加して運動している、4.正課体育の授業以外では運動をほとんど行っていない、の4つから1つ選択させた。

2. 調査の実施方法およびデータの処理

(1) 調査の実施方法

調査対象は、筑波大学で正課体育を受講している学生1年生～4年生 1563名で、抽出は無作為に行った。

調査は、昭和59年1月下旬から2月上旬に実施した。回収されたサンプル数は1080(有

効回収率、69.1%)であった。その内訳は、日常生活において運動クラブに所属して運動している者は374、自由時間に自由に運動している者は251、クラブ以外の体育的プログラムに参加している者は46、授業以外ではほとんど運動していない者は409であった。

(2) データの処理

調査用紙の回答をフロッピーディスクを媒体として筑波大学学術情報処理センターの大型電算機(FACOM M-200)に入力し、SPSSプログラムパッケージにより、日常の運動生活の状態と体育授業の目標に関する項目とのクロス集計を行った。

III 結果および考察

図1～図6は、日常生活において授業以外の運動活動の状態が、体育系の課外活動団体に所属して運動している者を積極群(n=374)、そして授業以外には意図的な運動をほとんど行っていない者を消極群(n=409)として、各質問項目に対する応答結果を、群別の平均値で示したものである。

t検定の結果、すべての項目において積極群と消極群間には1%水準で有意な差がみられた。

1. 健康の保持・増進に関して

図1は、健康の保持・増進に関する現在の意識の状態についての応答結果を群別に示したものである。

積極群はすべての項目において消極群より有意に値が高く、高い肯定度を示した。しかし消極群は「重要性の理解」においては4.04と高い肯定度を示したが、「方法の理解」においては3.40と肯定度が低くなり、運動実践レベルでは1.90と高い否定度を示した。また、「将来での運動実践の意図」においても3.12と積極群の4.00に比べ肯定度が低い。

2. 体力の維持・向上に関して

(1) 体力水準

図2は体力水準に関する現在の意識の状態

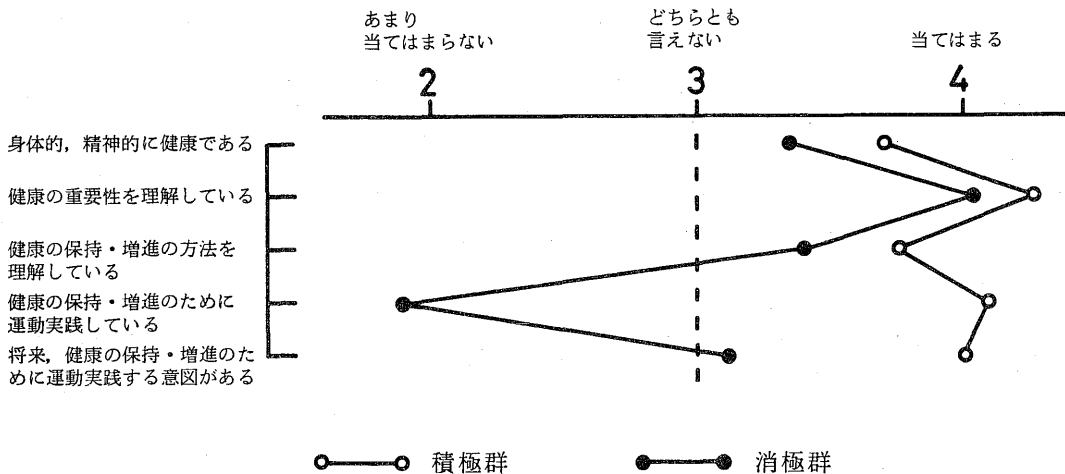


図1 健康に関する積極群と消極群の意識の現状

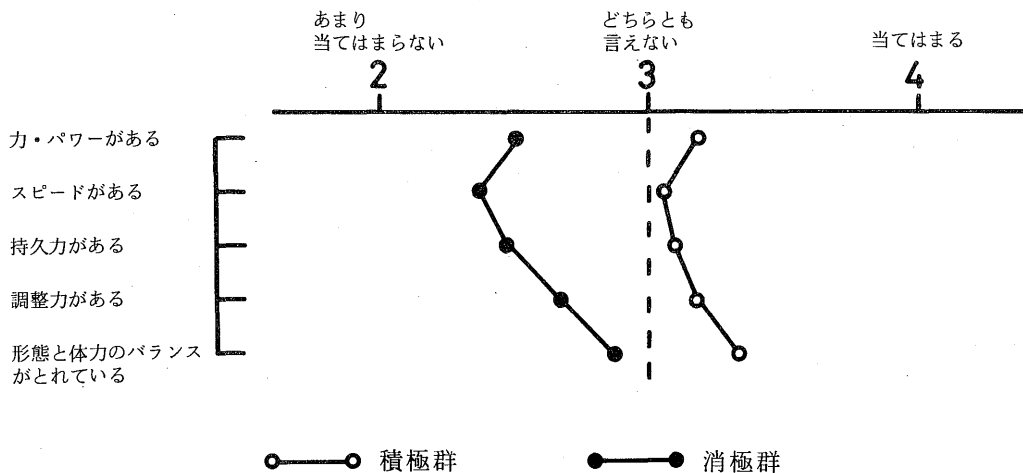


図2 体力水準に関する積極群と消極群の意識の現状

についての応答結果を群別に示したものである。

すべての体力要素について、積極群の方が消極群より有意に値が高く、肯定的傾向であったが、その肯定度は高くない。消極群はすべてにおいて否定的であり、特に「力・パワー」は2.51「スピード」は2.37、そして「持久力」は2.48と否定度が高い。これらの結果は、椿本らの¹⁰⁾「体力運動能力に関して、Club階層とStay階層の間には、すべての運動能力測定項目に顕著な差がある」という研

究結果と一致する。

(2) 体力の維持・向上

図3は体力の維持・向上に関する現在の意識の状態についての応答結果を群別に示したものである。

積極群はすべての項目において高い肯定度を示した。消極群は「重要性の理解」では3.69と高い肯定度を示したが、「方法の理解」では3.13、「将来での運動実践の意図」では3.02と肯定度が低い。そして、運動実践レベルでは1.92と高い否定度を示した。

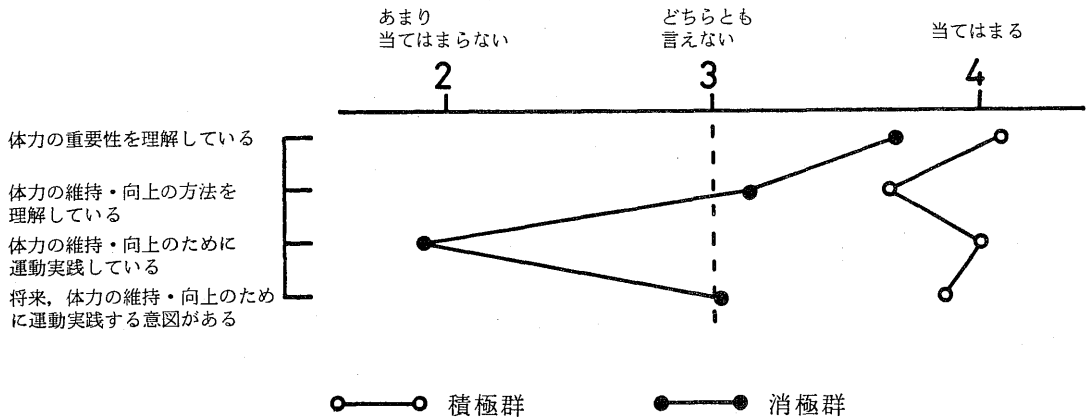


図3 体力に関する積極群と消極群の意識の現状

1.2.の(1),(2)の結果から、消極群における「重要性の理解」は「方法の理解」、「運動実践」、そして「実践の意図」に比べて良好な状態であることがわかる。しかし、樺本らの¹⁰⁾「健康への意識の高い運動生活階層は体力運動能力においても優れている」という指摘もあわせて考えると、単に重要性の理解だけでなく、方法、運動実践の意図をも含めた意識レベルを高めることが、消極群には必要であると考えられる。そして、積極群については、全般的に体力水準が良好な状態とはいえない。より望ましい体力を保持させるには、総合的な体力向上の方法を指導する必要があると考えられる。

3. 運動技能の習得に関して

図4は運動技能の習得に関する現在の意識の状態についての応答結果を群別に示したものである。

積極群はすべての項目について肯定的であり、消極群よりも有意にその肯定度が高い。しかし、「練習・指導法の理解」については3.27とどちらかといえば低い肯定度であった。消極群は「楽しめる程度の技能水準のスポーツの保有」では3.37と肯定的であったが、「ルールや審判法の理解」では3.25、「運動の良否の判断」では3.19、そして「安全な運

動実践の知識や態度」では3.04と肯定度は低くなる。しかも、「大学入学後の運動技能の向上」では2.92、「練習・指導法の理解」では2.54「運動実践」では1.81、「将来での運動実践の意図」では2.82と否定的であり、特に運動実践レベルでは否定度が高い。

以上の結果から、積極群には練習・指導法の理解がさらに深まるように指導すると現在より望ましい状態になると考えられる。しかし、消極群は、楽しめる程度の技能水準のスポーツの保有も積極群より良好な状態ではなく、練習・指導法など仲間と運動、スポーツをする時に必要な知識も充分とは考えられない。このような状態では、日常の運動活動において受身的立場にならざるをえず、しいては運動実践に対して消極的になると推察される。消極群がより運動を日常的に楽しめるように、練習・指導法の理解や技能を高めるとともに、安全のための知識、種目のルールと審判法への理解などを深める必要があると考えられる。

4. 社会的態度や能力の育成に関して

図5は社会的態度や能力の育成に関する現在の意識の状態についての応答結果を群別に示したものである。

積極群はすべての項目において消極群より

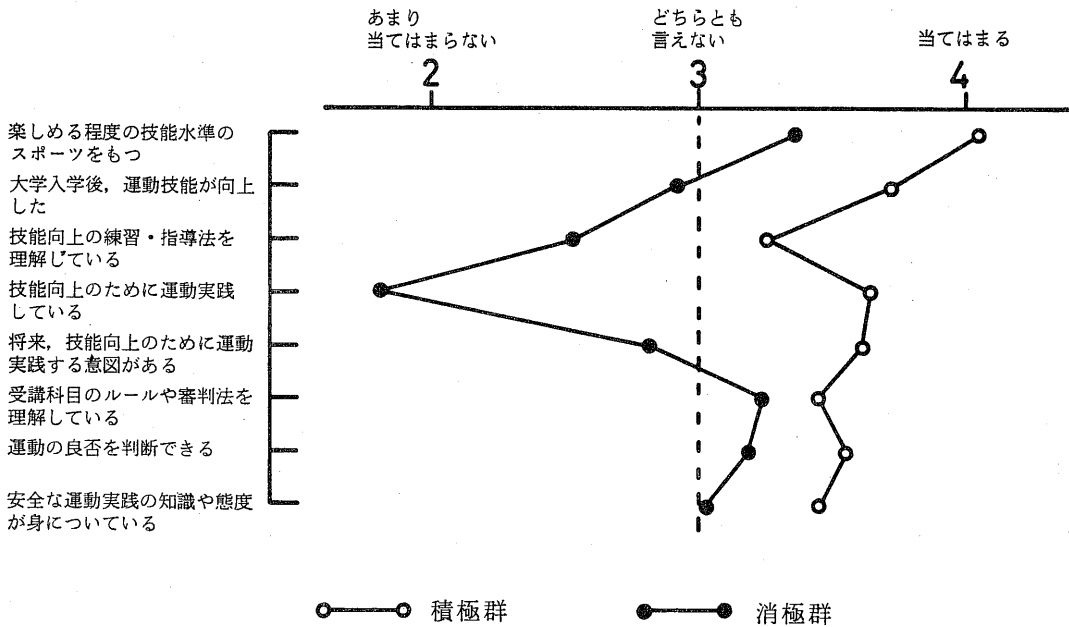


図4 運動技能に関する積極群と消極群の意識の現状

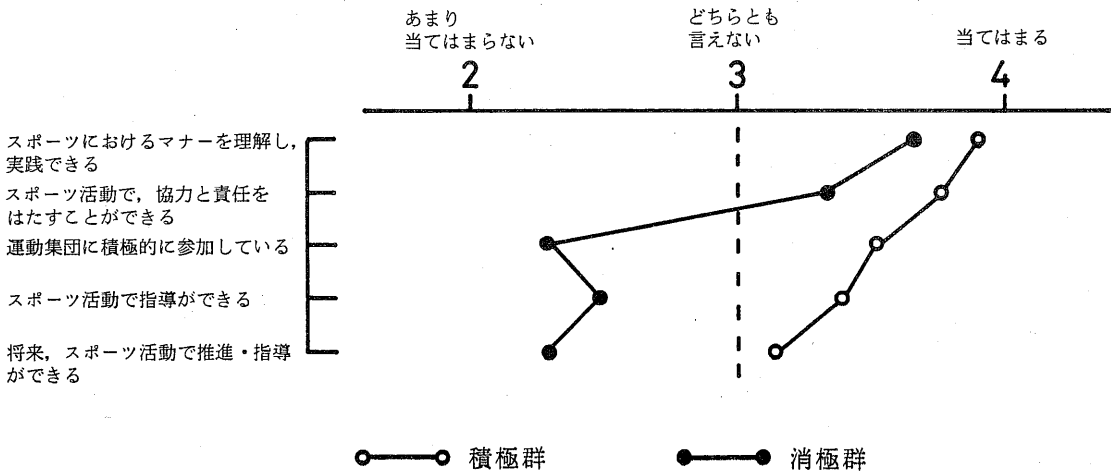


図5 社会性に関する積極群と消極群の意識の現状

高い値を示し、肯定的であった。しかし、「指導」では、3.39「将来での推進・指導」では3.14と他の項目の3.52~3.90に比べ、肯定度は低い。消極群は「マナーの理解」では3.66、「協力・責任」では3.34と肯定的であるが、「運動集団への参加」では2.29、「指導」では2.49、「将来での推進・指導」では2.30と強

い否定傾向を示した。

以上の結果から、両群共に、特に消極群は、運動・スポーツ集団での活動において、3.ににおいても推察されたことであるが、能動的でなく、受身的であると考えられる。今後、スポーツ活動に受身的でなく、能動的な立場で参加できるようにするには、推進および指導

能力を養う必要があると考えられる。

5. 生涯体育への基礎づくりに関して

図6は、生涯体育への基礎づくりに関する現在の意識の状態についての応答結果を群別に示したものである。

積極群はすべての項目において消極群より有意に高い値であり、肯定的であった。しかし、「体育・スポーツへの興味・関心」では4.19、「日常生活を豊かにするためのスポーツ実践」では3.88、「スポーツ観戦への嗜好」では4.33と肯定度が高いのに対し、「スポーツ行事への参加」と「将来でのスポーツ行事への参加の意図」では3.13と肯定度が低い。

消極群は「体育・スポーツへの興味・関心」では3.53、「スポーツ観戦への嗜好」では3.69の肯定的な結果を示したが、「日常生活を豊かにするためのスポーツ実践」では2.42、「スポーツ行事への参加」では2.15、そして「将来でのスポーツ行事への参加の意図」では2.48と否定的であった。

以上の結果から、両群とも他の項目に比べ、「スポーツ行事への参加」に関してあまり望ましい状態でないことがわかる。これは質問項目が「スポーツ・デーなどのスポーツ行事

に積極的に参加する」および「その意図がある」であった。そのため、スポーツ行事をスポーツ・デーという年2回定期的に開催され、限られた種目にしか参加できないものとイメージしたことも影響したと考えられる。しかし、授業においてスポーツ行事への参加の意義などの理解を深めさせ、個人的レベルでスポーツを実践するだけでなく、集団レベルでもスポーツを実践することにより、今後のスポーツ生活をより豊かにできるように指導する必要があると考えられる。消極群については、上記のことに加え、日常生活を豊かにするための一手段としてのスポーツ実践の意義を理解させるような指導が必要であろう。

まとめ

日常生活において積極的に運動している者(374名)と授業以外ではほとんど運動をしていない者(409名)の調査資料をもとに、両者の体育の目標に照した意識の現状における相違を検討し、これらの対象において次のような結果をえた。

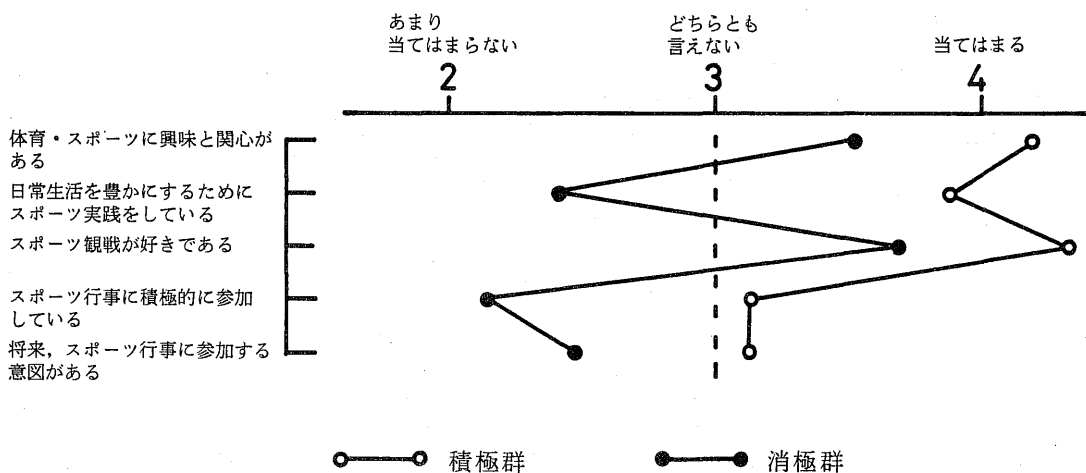


図6 生涯体育に関する積極群と消極群の意識の現状

(1) 積極群は消極群に比べ、すべての項目において有意に値が高く、肯定的状態であった。特に当然のことであるが、実践および将来での実践の意図のレベルにおいては大きな差がみられた。

(2) しかし、積極群は「体力水準」、「技能向上のための練習・指導法」、「スポーツ活動での指導」、「将来でのスポーツ活動の推進・指導」そして「スポーツ行事への参加およびその意図」において肯定度が低かった。

(3) 消極群は、「健康および体力の重要性の理解」、「スポーツにおけるマナーの理解と実践」そして「体育・スポーツへの興味・関心」では高い肯定度を示した。

(4) しかし、消極群は当然のことながら実践レベルと「運動集団、スポーツ行事への参加」では、否定度が特に高い。「体力水準」、「大学入学後の技能向上」、「技能向上のための練習・指導法の理解」、「スポーツ活動での指導や将来でのその推進や指導」、「スポーツ実践の意図」そして「運動集団やスポーツ行事への参加の意図」等においても否定的傾向を示した。

これらの結果からもわかるように、日常的に授業以外でも積極的に運動をしている者と授業以外ではほとんど運動を行っていない者では、体育目標に関する現在の意識の状態に顕著な相違がみられた。そのために、正課体授業においては、目標達成に向けて積極群と消極群の現状に応じた学習内容、学習課題、指導の力点などを適性化して授業を進める必要があるだろう。

引用・参考文献

- 1) 浅田隆夫 他, 大学体育研究 (第1号) — 高等教育におけるマネジメントシステムの開発研究 —, 筑波大学体育センター, 1979.
- 2) 江刺正吾, 学生の生活とスポーツ, 道和書院, 1980.
- 3) 海野孝 他, 大学正課体育における授業効果

に関する研究, 大学体育研究, 6: 105-124, 1984.

- 4) 松下雅雄, 山川岩之助, 筑波大学学生の正課体育への対応状況—運動生活階層に着目して—, 大学体育研究, 5: 51-63, 1983.
- 5) 宮地力, 筑波大学生の運動生活調査—Stay階層の運動生活—, 大学体育研究, 4: 177-187, 1982.
- 6) 岡野崇彦 他, 大学正課体育実技の教育効果に関する研究—(5) 体育実技授業に対する態度—, 体育学紀要(東京大学教養部), 6: 27-32, 1972.
- 7) 篠田邦彦 他, 精神的データからみた筑波大学生像, 大学体育研究, 2: 26-31, 1980.
- 8) 徳永幹雄, 荒井貞夫, 体育実技に対する態度の変容とその要因, 九州大学体育学研究, 4-5: 27-35, 1972.
- 9) 椿本昇三, 浅井武, 寄金義紀, 運動生活階層別にみた筑波大学学生の健康への意識と体力・運動能力との関係, 大学体育研究, 5: 65-72, 1983.
- 10) 椿本昇三ら, 前掲書, p. 69.
- 11) 山川岩之助 他, 筑波大学生の運動生活に関する調査, 大学体育研究, 6: 63-104, 1984.
- 12) 安ヶ平浩 他, 運動生活の実態と正課体育履修, 大学体育研究, 4: 188-198, 1982.